

■研究調査レビュー

奄美の方言

木部 暢子（鹿児島大学法文学部）

はじめに

奄美諸島は鹿児島県に属していますが、ことばは鹿児島とは大きく異なっていて、むしろ沖縄県のことばと近い関係にあります。それは、奄美の歴史と深い関係があります。奄美の歴史は独立時代（～15世紀中頃）、琉球王朝征服時代（15世紀中頃～1609年）、薩摩藩直轄時代（1609年～明治維新）、現代（明治維新～現在）の4つに分けることができます。第2期の琉球王朝征服時代に琉球のことばが大量に奄美に取り入れられたと思われませんが、それ以前の独立時代にも、奄美は琉球の文化圏に入っていたから、琉球のことばの影響を強く受けたであろうと思われま

す。第3期の薩摩藩直轄時代には、奄美には薩摩のことばが入ってきました。しかし、このことによって奄美のことばが大きく変わるようなことはありませんでした。第4期の明治以降は、奄美も他の地域と同様、標準語化の道を歩むこととなります。他の地域に比べて標準語との隔たりの大きかった鹿児島、奄美、沖縄では、標準語教育が熱心に行われました。その一端を「方言札」にうかがうことができます。「方言札」とは、学校で方言をしゃべると罰として首からぶら下げさせられた札のことです。地域により形や大きさ等に違いがありましたが、「方言札」と書かれていたり、「私は方言をしゃべりました」と書かれていたりしたそうです。西村浩子（1998）、近藤健一郎（1999）などの報告や、『AMAMI News Letter』No.8の前田晶子氏の報告にもあるように、昭和28年の日本復帰以降も奄美では盛んに共通語教育が行われました。このような教育の結果、確

かに標準語は普及しましたが、逆に方言が急速に衰退する事態となりました。今の若い人たちは、もはや伝統的な方言をほとんど話すことができません。若い人の間で使われるのは、標準語と方言のまざったことば、いわゆるネオ方言です。これらはそれぞれの地域で、「からいも普通語」（鹿児島）、「トン普通語」（奄美）、「ウチナーヤマトゥグチ」（沖縄）と呼ばれています。

この報告では、なるべく伝統的な方言を書き留めておきたいと思えます。そのために、以下のような項目について述べることにします。

- 1, 奄美方言の位置づけ
- 2, 奄美方言の特徴
- 3, 奄美方言の保存

なお、多少、言語学の専門的な話になるかもしれませんが、方言はカタカナ表記を基本とし、できるだけわかりやすく説明したいと思えます。音声記号の方は読み飛ばしていただいで結構です。

1, 奄美方言の位置づけ

日本の方言はまず、大きく本土方言と琉球方言に分けられます。二つの方言の境界は鹿児島県のトカラ列島宝島と奄美大島の間にあります。奄美方言は琉球方言圏の最も北側に位置しているわけです。このあたりはまた、動物分布上の重要な境界線である渡瀬線も走っていて、自然・民俗・言語など、いろいろな面での大きな境界が集中しているところでもあります。

奄美方言とひとくちに言っても、その中にはさらに細かな違いがあります。島ごとに違

いますし、また、島の中でも集落ごとに違います。交通が不便で、人の交流が遮断されていたことを考えると、方言差が大きいのは当然のことですが、細かく分けていくときりがありません。そこで、基本的な特徴だけを捉えて大別すると、まずは北奄美方言（奄美大島・徳之島・喜界島北部）、南奄美方言（喜界島南部・沖永良部島・与論島）の二つに分けることができます。両者は発音のしかたがかなり違っていて、例えば、「目」のことを北奄美方言では「ムィ (mi)」と発音しますが、南奄美方言では「ミ (mi)」と発音します。図1に南九州方言と琉球方言の方言区画をあげておきます。

2, 奄美方言の特徴

奄美方言は本土方言とはかなり違っていますが、よく調べてみると、発音の上で本土方言との間に規則的な対応関係があることが分かってきます。先に「目」という語を例に挙げましたが、「目」に限らず、「手」、「胸」、「船」などに現れる e 母音は、北奄美方言ではことごとく「トィ (ti)」、「ムヌィ (muni)」、「フヌィ (Funi)」のように中舌性のイ[i]で発音され、南奄美方言ではことごとく「ティ (ti)」、「ムニ (muni)」、「プニ (puni)」のように普通のイ[i]で発音されます。

このような対応関係はどのようにして生じたのでしょうか。それはおそらく、本土方言と奄美方言とはもとは同じ単語を使っていたけれども、それぞれの地域でだんだんと発音のしかたが変化して、現在のような対応関係が生じたということではないかと思われます（図2）。

たとえば言うと、親から同じ遺伝子を受け取った兄弟が、それぞれ別の環境で生活するうちに、表面上は兄弟とは分からないくらいに変わってしまったが、何かの折りに兄弟であることを思わせるような一面をのぞかせる、といったようなことです。問題は、元と

なる語形（遺伝子、図2で言えば左端の[*χo]）が、どこからどのようにしてもたらされたのかということです。可能性としては、(1)本土系の単語が南下して琉球にもたらされ、奄美にももたらされた、(2)琉球系の単語が北上して本土にもたらされた、(3)第三者の使っていた単語が本土と琉球にもたらされた、というような事情が考えられます。現在のところ、(1)を想定することが多いようですが、(2)や(3)の可能性もおおいにあります。ただ、この問題はすぐに解決がつくようなものではないので、可能性の指摘だけに止め、以下では、本土のことばの代表としての共通語と、奄美方言を比較しながら、奄美方言の特徴を見ていくことにします。

2.1 音声の特色

2.1.1 母音の特徴

(1)母音の種類 北奄美方言の母音の種類は、/i/, /i/, /u/, /e/, /è/, /o/, /a/の7種類です（図3）。共通語の母音は /i/, /u/, /e/, /o/, /a/の5種類ですから（図4）、北奄美方言の方が2種類多いこととなります。北奄美方言に特有の母音は、/i/ ([i]と[u]の中間の発音) と /è/ ([e]と[o]の中間の発音) の2種類です。一方、南奄美方言の母音は、共通語と同じ /i/, /u/, /e/, /o/, /a/ の5種類です（図5）。ただし、共通語と同じとはいっても、数と種類が同じというだけで、その内容は異なっています。

図1 南九州方言と琉球方言の方言区画

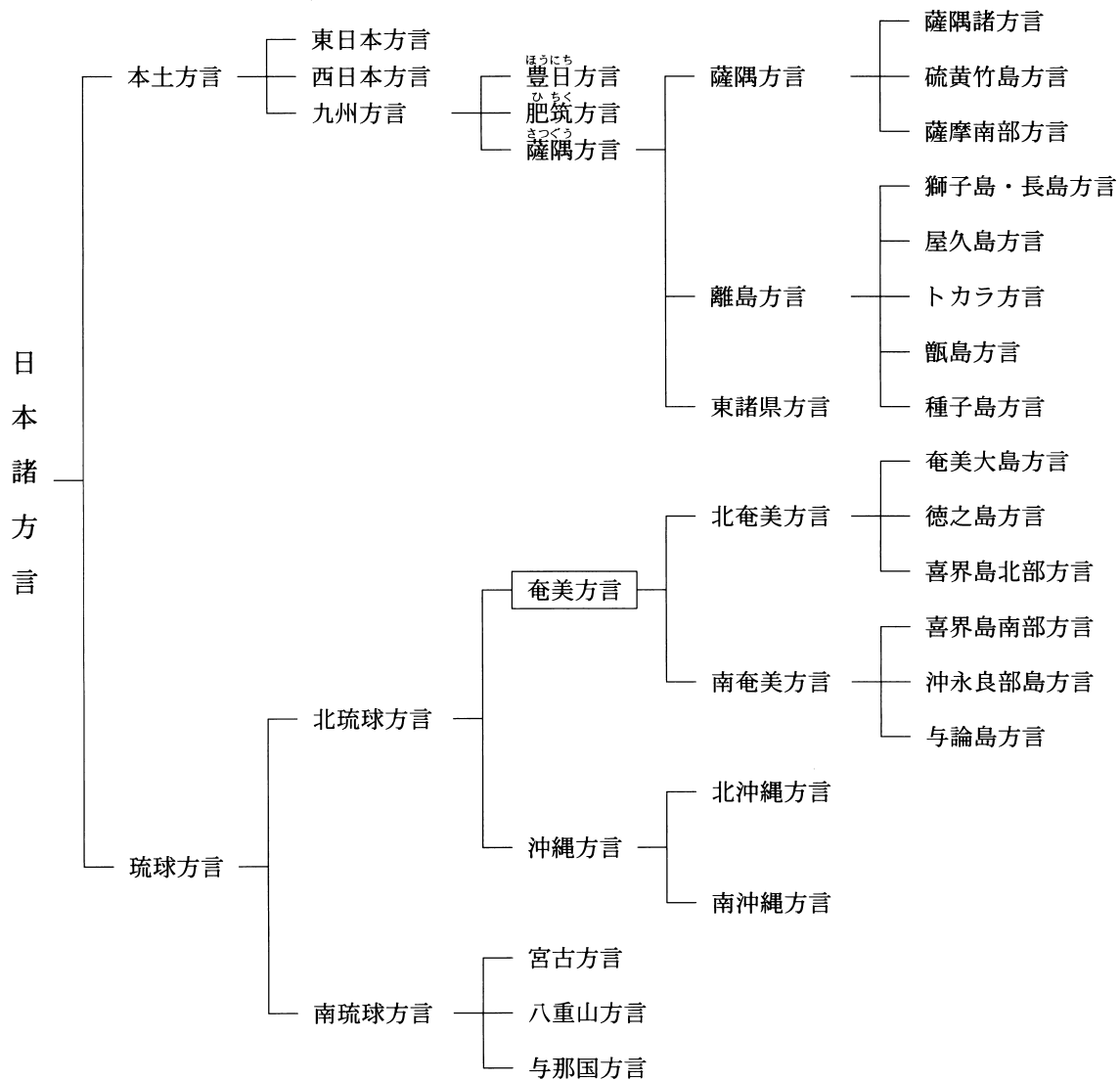
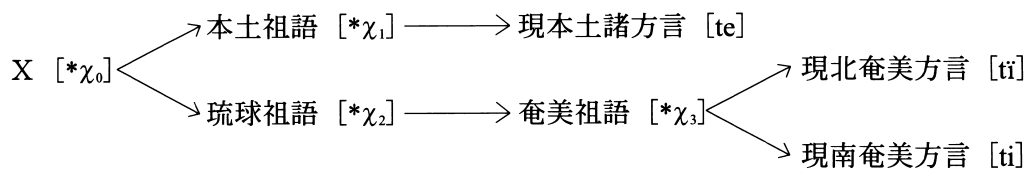


図2 「手」という語の諸方言対応



(注) *は想定形を表す。

図3 北奄美方言の母音体系

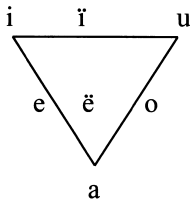


図4 共通語の母音体系

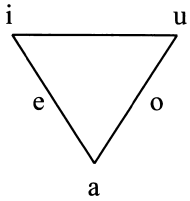
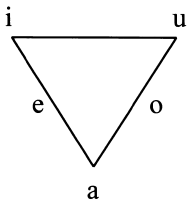


図5 南奄美方言の母音体系



(2)母音の対応 次に、奄美方言と共通語との母音の対応関係を見てみましょう。共通語の a, i, u, e, o は北奄美方言では a, i, u, ĩ, u と発音されます。これに対し、南奄美方言では a, i, u, i, u と発音されます。従って、基本的な母音は、北奄美方言では a, i, u, ĩ の4母音、南奄美方言では a, i, u の3母音です。表1に例を挙げておきましょう。

表1

	単語	北奄美	南奄美
a	鼻	ハナ [hana]	パナ [pana]
	雨	アムイ [ami]	アミ [ami]
i	血	チ [tʃi]	チー [tʃi:]
	霧	キ'リ [ʔkiri]	チリ [tʃiri]
u	胸	ムヌイ [muni]	ムニ [muni]
	口	クチ [kutʃi]	クチ [kutʃi]
e	目	ムイ [mi]	ミー [mi:]
	手	トイ [ti]	ティー [ti:]
o	音	ウトウ [ʔutu]	ウトウ [ʔutu]
	鳥	トゥリ [turi]	トゥイ [tui]

ただし、表2に示したように、共通語の o は南奄美では必ず u になりますが、北奄美では o になることもあります。

表2

単語	北奄美	南奄美
桃	モモ [momo]	ムム [mumu]
雲	ク'モ [ʔkumo]	ク'ム [ʔkumu]

では、基本的な母音以外の母音は、どのようにして生じたのでしょうか。これらは、連母音の ai, ae, ao, au 等が融合したものです。表3に例を挙げておきます。

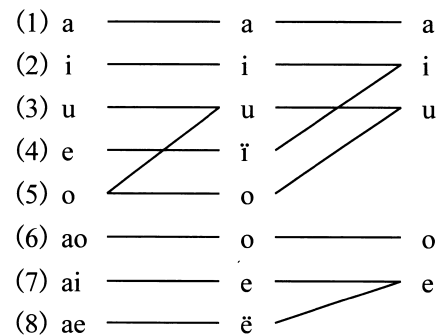
表3

	単語	北奄美	南奄美
ao	青い	オーサ [ʔo:sa]	オーサイ [ʔo:sai]
au	川	コラ [kora]	ハーラ [ha:ra]
ai	青年 (二歳)	ネセ [nese]	ニセー [nise:]
ae	前	モエー [më:]	メー [me:]
	南(はえ)	フォエ [Fë:]	ペー [pe:]

三方言の対応関係を図示すると、図6のようになります。

図6 母音の対応

〈共通語〉 〈北奄美方言〉 〈南奄美方言〉



(3)奄美方言の母音の成立 上のような対応関係ができた経緯について、通説では、本土の5母音体系がもとで、これが変化して北奄美や南奄美の母音体系ができたと言われている。

ます。中本正智 (1976) によると、まず、連母音の ai や au が融合して、ε (広めのエ) や o (広めのオ) ができます。これらは元からあった e や o にきわめて近い発音だったので、e や o はこれとの混同を避けるために、i や u の方へ逃げます (図7)。空きになった e や o の位置に ε や o が納まったのが北奄美方言で、i がさらに i の方向へ逃げて i に合流した (図8) のが南奄美方言です。

図7 母音の推移 (1)

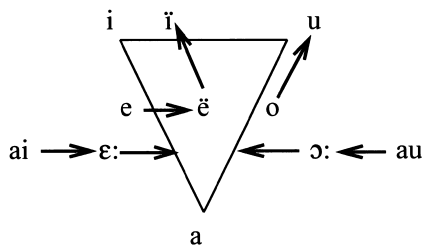
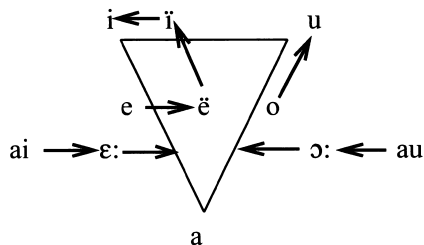


図8 母音の推移 (2)



中本正智 (1976) より引用

(4)対応の例外 ただし、語によっては上の対応通りにならないものがあります。

(4.1) i と i の対応の例外 例えば「めし (飯)」や「ひげ (髭)」は共通語では e 母音を持ちますから、ルールからいうと北奄美で「ミシ [miʃi]」、「ヒグイ [çiɡi]」、南奄美方言で「ミシ [miʃi]」、「ピギ [piɡi]」となるはずですが、実際には北奄美方言でも「ミシ [miʃi]」、「ヒギ [çiɡi]」です。これは、その音の前後に i 母音があるために(「めし」のシ、「ひげ」のヒ)、これに同化されて i が i になったものです。逆に、i になるはず

がないのに i になることもあります。例えば「き (木)」や「みず (水)」、「ゆび (指)」は共通語では e 母音を持ちませんから、北奄美方言で i になるはずがないのですが、実際には「クイ [ki]」、「ミズイ [mizɪ]」、「ユブイ [jubɪ]」です。「木」に関しては、古代日本語では「ケ」という発音だったのではないかという説がありますが、それ以外は未詳です。

(4.2) o と u の対応の例外 共通語の o は北奄美方言で u になるのが原則ですが、o になる場合がかなりあります。どのような場合に o になるのか、きちんと規則化できないのですが、だいたい次のような傾向があります。

①語頭では u になりやすく、語中語尾では o になりやすい。

(語頭) ドウルイ [duri] (どれ)

トゥリ [turi] (鶏)

クルイ [kuri] (これ)

(語中語尾) アド [ʔado] (かかと)

イト [ʔito] (糸) トホ [toho] (蛸)

②前か後に m の子音がある場合には o になりやすい。

モモ [momo] (桃)

モモタブラ [momotabura] (腿)

'オモ [ʔomo] (里芋)

ただし、語頭の場合は u になりやすい。

ムン [muN] (物) ムリ [muri] (森)

ムチ [mutʃi] (餅)

③子音 k が h 化し、さらに脱落して長音になっている場合には o になる。

コーロ [ko:ro] (心)

ホーラシャ [ho:raʃa] (誇らしい(嬉しい))

ドロー [doro:] (所)

コノツイ [konotsɪ] (九つ)

それぞれは、次のような音変化をたどったと思われます。

「心」kokoro > kohoro > kooro > ko:ro

「嬉しい」hokoraʃa > hohoraʃa > hoorafa

> ho:rafa

「所」 dokoro > dohorō > dooro > dorō:

「九つ」 kokonotsi > kohonotsi > koonotsi

> ko:notsi > konotsi

④長音の場合には o になる。

コーモリ [ko:mori] (こうもり)

ローソク [ro:soku] (ろうそく)

⑤第1音節目の母音が u であれば u になりやすく、o であれば o になりやすい。その意味で北奄美方言の u と o は母音調和的な面を持っています。

u: フス [Fusu] (ホソ (へそ))

クルサ [ʔkurusā] (黒い)

ウトウトウ [wututu] (弟)

ウトウ [wutu] (夫)

ウトウドウシ [wutudufi] (一昨年)

o: モモ [momo] (桃)

モモタブラ [momotabura] (腿)

'オモ [ʔomo] (里芋)

コーロ [ko:ro] (心)

ドロー [doro:] (所)

コーモリ [ko:mori] (こうもり)

⑥古代日本語のオの甲・乙の違いに対応するという説(奥村三雄 1990)もありますが、上に述べたように、音環境が影響して o になっている場合が多く、古代日本語のオの甲・乙に遡るとは必ずしも言えません。

(4.3) ai と e の対応の例外 共通語の ai は北奄美方言で e に対応しますが、そうでない例もあります。例えば「コエーニャ[kē:nja] (肩<かいな)」, 「ドコネ[dokone] (大根)」は ai という母音連続を持ちますが、北奄美方言では e ではなく、ë や o になっています。それは、「肩 (かいな)」では後ろに a 母音があるため、これに引かれて e が ë になったもの、「大根」は後ろに o 母音があるため、これに引かれて e が o になったものと思われる。

このように、北奄美方言の母音には対応の例外がいくつかありますが、それらは、いっ

たんは図7のような変化を起こしたあと(あるいは変化の途中で)、前後の音に同化されて対応の例外となったものだと思います。

2.1.2 子音の特徴(北奄美方言)

まず、北奄美方言を取り上げることにします。北奄美方言といっても、地域により差がありますので、龍郷町瀬留^{たつごうちょうせどめ}の方言を中心に報告します。

(1)カ行 カ行音には以下のようなものがあります。共通語との対応関係も併せて上げておきます。

〈共通語〉		〈龍郷町〉
カ [ka]	——	カ [ka]
キ [ki]	——	キ' [ʔki]
	——	キ [ki]
ク [ku]	——	ク' [ʔku]
	——	ク [ku]
ケ [ke]	——	クイ [ki]
コ [ko]	——	コ [ko]
カオ [kao]	——	

①共通語の力は龍郷町でもカ[ka]です。

カ: カカド [kakado] (かかと)

カンナリ [kannari] (雷)

②キに二種類あります。一つは、息を出さずに喉頭を閉鎖して発音するキ'[ʔki] (無気喉頭化音)、もう一つは共通語と同じように息を出すキ[ki] (有気音)です。語頭ではキ'[ʔki]、語中語尾ではキ[ki]になるのが一般的ですが、母音が無声化している場合には語頭でもキ[ki]になります。

キ': キ'リ [ʔkiri] (霧) キ'モ [ʔkimo] (肝)

キ: キク [kiku] (菊) (キが無声化)

アキ [aki] (秋)

③クにもク'[ʔku] (無気喉頭化音)とク[ku] (有気音)の二種類があります。語頭ではク'[ʔku]になり、語中語尾ではク[ku]になる点もキと同じです。

ク': ク'ビ [ʔkubi] (首)

ク'モ [ʔkumo] (雲)

ク：クシ [kufi] (櫛) (クが無声化)

クサ [kusa] (草) (")

サクラ [sakura] (桜)

- ④共通語のケはクイ[kī]になりますが、母音の箇所ですべてたとおりの、この対応規則には例外もあります。

クイ：クイブシ [kībuʃi] (煙)

クイ [kī] (木)

- ⑤共通語のコはク[ku]になる場合とコ[ko]になる場合があります。[ku]になるのが一般的で、コ[ko]になるのは k の h 化が関係している場合や、長音の場合です。

ク：クムイ [kumī] (米)

クリュ [kurī] (これ)

クシ [kufi] (腰)

コ：コーロ [ko:ro] (心)

コーモリ [ko:mori] (こうもり)

このク[ku]はすべて有気音のク[ku]です。

つまり、龍郷町方言では、

共通語のク：龍郷町方言のク[ʔku]

共通語のコ：龍郷町方言のク[ku]

というふうに「く」と「こ」を区別しているのです。また、龍郷町のコ[ko]は共通語のクウなどの連母音にも対応します。

コ：コ[ko] (川) < kaw < kawa

- ⑥語中語尾でしばしば k が h になります。

ただし、丁寧に発音すると k になります。

イ'キヤ～イ'ヒヤ [ʔikja ~ ʔiça] (烏賊)

デケラン～デヘラン [dekeran ~ deheran]

(出来ない)

イ'キュン～イ'ヒュン [ʔikjuN ~ ʔiçun]

(行く)

イ'クィ～イ'ヘィ [ʔiki ~ ʔiçi] (行け)

- ⑦この h が脱落することがあります。脱落が起きるのは、a, e, o などの広母音や半広母音に k (h) がはさまれた場合です。

a__a：ナーユブィ [na:jubi] (中指)

< naajubi < nahajubi < nakajubi

a__e：ハテ [hate] (畑)

< hatee < hatahe < hatake

o__o：コーロ [ko:ro] (心)

しかし、次のような語では h が脱落しません。丁寧な発音でも h のままです。

ホ：トホ [toho] (蛸) モホ [moho] (婿)

- ⑧この他にコエ[kē], キヤ[kja], キュ[kju], キョ[kjo], クワ[kwa], ク'ワ[ʔkwa]があります。それぞれの音は次のような単語に現れます。

コエ：コエーニヤ [kē:nja] (肩<かいな)

キヤ：ワキヤ[wakja] (私たち)

ビツキヤ [bikkja] (蛙)

キュ：カキュン [kakjuN] (書く)

キュ [kju] (今日)

キョ：キョデ [kjode] (兄弟)

クワ：クワンジェン [kwanzeN] (完全)

ク'ワ [ʔkwa]：ク'ワ [ʔkwa] (子)

- (2)ガ行 ガ行音には以下のようなものがあります。

〈共通語〉		〈龍郷町〉
ガ[ga]	—	ガ[ga]
ギ[gi]	—	ギ[gi]
グ[gu]	—	グ[gu]
ゲ[ge]	—	グィ[gi]
ゴ[go]	—	ゴ[go]
		グワ[gwa]

以下に例を挙げておきます。

ガ：ガン [gaN] (蟹)

マ'ーガ [ʔma:ga] (孫)

インガ [jɪŋga] (男)

ギ：ヒギ [çiçi] (髭)

ハギ [hagi] (足)

ヤギ [jagi] (山羊)

グ：ウナグ [wunagu] (女)

クグ [kugu] (漕ぐ)

グィ：シラグィ [ʃiraçi] (白髪)

クグィ [kuçi] (漕げ)

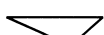



ゴ：ゴマ [goma] (胡麻)

クゴ [kugo] (漕ごう)

グワ：ショ'グワツ [ʃo:gwatsu] (正月)

- (3)サ行 サ行音には以下のようなものがあります。

ります。

〈共通語〉		〈龍郷町〉
サ[sɑ]	——	サ[sɑ]
シ[ʃi]	——	シ[ʃi]
ス[su]		ス[su]
セ[se]		スイ[sɯi]
ソ[sɔ]		ソ[sɔ]
サオ[sɑo]		シエ[ʃe]

- ①共通語のサは龍郷町でもサ[sɑ], 共通語のシは龍郷町でもシ[ʃi]です。

サ：サタ [sata] (砂糖) クサ [kusa] (草)
 アサッテ [ʔasatte] (明後日)
 シ：シルサ [ʃirusa] (白い)
 シラグイ [ʃiragi] (白髪)
 ハシ [haʃi] (橋)

- ②共通語のスはス[su]と発音される場合とスイ[sɯi]と発音される場合があります。スイ[sɯi]が一般的ですが、直前に u 母音がある時や直後に両唇音の b, m などがある時にはス[su]と発音される傾向があります。

ス：クスリ [kusuri] (薬) スバ [suba] (舌)
 スイ：スイ [sɯi] (巢) スイズイ [sɯizi] (筋)
 ガラスイ [garasi] (烏)

- ③共通語のセはスイ[sɯi]と発音される場合とシエ[ʃe]と発音される場合があります。スイ[sɯi]が一般的ですが、新しい単語ではシエ[ʃe]になります。

スイ：フスイ [Fusi] (起こせ)
 シエ：シェナカ [ʃenaka] (背中)
 シエンセー [ʃenʃe:] (先生)

- ④共通語のソはス[su]と発音される場合とソ[sɔ]発音される場合があります。ス[su]と発音されるのが一般的ですが、新しい単語ではソ[sɔ]になります。また、共通語の連母音のサオに対応する場合もソ[sɔ]になります。

ス：ミス [misu] (味噌)
 フス [Fusu] (ホソ (へそ))
 ソ：ローソク [ro:soku] (ろうそく)
 ソ [so] (竿)

- ⑤この他にセ[se], ソエ[sɛ], シャ[ʃa], シュ[ʃu], ショ[ʃo]があります。

セ：ネセ [nese] (二才 (青年))
 ソエ：ソエー [sɛ:] (酒)
 シャ：ハスカシャ [hasukaja] (恥かしい)
 キシャン [kiʃaN] (着た)
 シュ：マシュ [maʃu] (塩)
 シュン [ʃuN] (する)

ショ：ショークワツ [ʃo:gwatsu] (正月)

- (4)ザ行 ザ行音には以下のようなものがあります。

〈共通語〉		〈龍郷町〉
ザ[za]	——	ザ[za]
ジ[ʒi]	——	ジ[ʒi]
ズ[zu]		ズイ[zi]
ゼ[ze]		ジェ[ʒe]
ゾ[zo]		ゾ[zo]
ザオ[zao]		

- ①共通語のザは龍郷町でもザ[za], ジはジ[ʒi]です。なお、ザ行のジとダ行のヂは区別がありません。

ザ：ヒザ [çiza] (膝)
 クルザタ [kuruzata] (黒砂糖)
 ジ：トゥジ [tuʒi] (刀自 (妻))
 ジー [ʒi:] (地面) ウジ [wuʒi] (叔父)
 ヒジ [çiʒi] (肘)

- ②共通語のズは龍郷町ではズイ[zi]と発音されます。ズとヅの区別はありません。

ズイ：ヌイズイン [nɯiziN] (鼠)
 ムイズイ [mɯizi] (水)
 ジョーズイ [ʒo:zi] (上手)

- ③共通語のゼはズイ[zi]と発音される場合とジェ[ʒe]と発音される場合があります。ズイ[zi]が一般的ですが、新しい語ではジェ[ʒe]と発音されます。

ズイ：カズイ [kazi] (風)
 ジェ：ジェンブ [ʒembu] (全部)

- ④この他にジャ[ʒa], ジュ[ʒu], ジョ[ʒo]があります。

ジャ：ヒジャリ [çiʒari] (左)

イ'ジャン [ʔiʒaŋ] (行った)

シジャン [ʃiʒaŋ] (死んだ)

ジュ：ジュー [ʒu:] (お父さん)

ジョ：ジョーズィ [ʒo:zi] (上手)

(5)タ行 タ行音には以下のようなものがあります。

〈共通語〉		〈龍郷町〉
タ[ta]	——	タ[ta]
チ[tʃi]	——	チ[tʃi]
ツ[tsu]	↙	ツ[tsu]
		ツイ[tsi]
テ[te]	——	トィ[tʰi]
ト[to]	↙	トゥ[tu]
		ト[to]

①共通語のタは龍郷町でもタ[ta]、共通語のチは龍郷町でもチ[tʃi]と発音されます。

タ：ターサ [ta:sa] (高い)

カタ [kata] (肩)

チ：チ [tʃi] (血)

チキヤサ [tʃikjasa] (近い)

②共通語のツはツ[tsu]と発音される場合とツイ[tsi]と発音される場合があります。ツ[tsu]は語頭や新しい単語に現れやすく、ツイ[tsi]は中語尾に現れやすいという傾向があります。

ツ：ツムィ [tsumi] (爪) ツユ [tsuju] (露)

ナツ [natsu] (夏)

ツイ：ミツイ [mitsi] (三つ)

マツイ [matsi] (火)

③共通語のテは龍郷町ではトィ[tʰi]と発音されます。

トィ：トィ[tʰi] (手) トィン [tiŋ] (天)

ウ'トィタ [ʔutita] (オテタ (落ちた))

④共通語のトはトゥ[tu]と発音される場合とト[to]と発音される場合があります。語頭ではトゥ[tu]、語中語尾ではト[to]になる傾向があります。

トゥ：トゥジ [tuʒi] (刀自 (妻))

トウキ [tuki] (時)

トウリ [turi] (鶏)

ト：イ'トコ [ʔitoko] (従兄)

イ'ト [ʔito] (糸)

⑤チ、ツは無声化が著しい時にはシ[ʃi]、ス[su]となることがあります。

チキヤサ～シキヤサ (近い)

[tʃikjasa ~ ʃikjasa]

ナツカシャ～ナスカシャ (懐かしい)

[natsukaʃa ~ nasukaʃa]

⑥この他にチャ[tʃa]、チュ[tʃu]、タ' [ʔta]、ト'イ [ʔti]、チ'ャ [ʔtʃa]、チ'ユ [ʔtʃu]があります。タ' [ʔta]、ト'イ [ʔti]、チ'ャ [ʔtʃa]、チ'ユ [ʔtʃu]は無気喉頭化音で、もとは直前にヒやフなどの音があったところ、これが脱落したために生じた音です。

チャ：イ'チャン [ʔitʃaŋ] (良い)

シツチャン [ʃittʃaŋ] (来た)

チュ：マチュン [matʃuŋ] (待つ)

フツチュ [futtʃu] (大人)

タ'：タ'ツイ [ʔtatsi] (ふたつ)

タ'リ [ʔtari] (ふたり)

ト'イ：ト'イツィ [ʔtitsi] (ひとつ)

チ'ャ：チ'ャン [ʔtʃaŋ] (お父さん)

<おっちゃん>

チ'ユ：チ'ユリ [ʔtʃuri] (ひとり)

チ'ユ [ʔtʃu] (人)

(6)ダ行 ダ行音には以下のようなものがあります。

〈共通語〉

〈龍郷町〉

ダ[da] —— ダ[da]

デ[de] —— ドィ[di]

ド[do] ↙ ドゥ[du]

ド[do]

①共通語のダは龍郷町でもダ[da]と発音されます。

ダ：ユダ [juda] (枝) ナダ [nada] (涙)

トィダ [tʰida] (太陽)

②共通語のデ (ゼから変化したものを含む)は龍郷町ではドィ[di]で発音されます。

ドィ：ヤドィ [jadʰi] (病んで (痛くて))

トウドィンナカ [tudinnaka] (徒然な)

か (寂しい)

- ③ 共通語のドはドウ[du]になる場合とド[do]になる場合があります。語頭ではドウ[du], 語中語尾ではド[do]になる傾向があります。

ドウ：ドゥリ [duri] (どれ)

ド：アド [ʔado] (かかと)

マド [mado] (窓)

- ④ この他にデ[de]がありますが、これは共通語の連母音に対応します。

デー [de:] (竹) < dae < dahe < dake

- (7) ナ行 ナ行音には以下のようなものがあります。

〈共通語〉		〈龍郷町〉
ナ[na]	——	ナ[sa]
ニ[nji]	——	ニ[nji]
ヌ[nu]	——	ヌ[nu]
ネ[ne]	——	ヌイ[ni]
ノ[no]	——	ノ[no]
ナイ[nai]	——	ネ[ne]

- ① 共通語のナは龍郷町でもナ[na], ニはニ[nji], ヌはヌ[nu]です。

ナ：ナダ [nada] (涙)

ナガシ [nagaʃi] (梅雨)

ハナ [hana] (鼻)

ニ：ニシ [niʃi] (北)

ヌ：ヌクサ [nukusa] (温かい)

- ② 共通語のネは龍郷町ではヌイ[ni]と発音されます。

ヌイ：ヌイグリ [niɡuri] (根)

ムヌイ [munʃi] (胸)

フヌイ [funʃi] (骨)

- ③ 共通語のノはヌ[nu]と発音される場合とノ[no]と発音される場合があります。ヌ[nu]が一般的ですが、語中語尾ではノ[no]と発音されることがあり、また、kの脱落により長音になっている場合にはノ[no]になります。

ヌ：ヌドイ [nudʃi] (喉)

トゥリヌスイ [turinusʃi] (鳥の巣)

ノ：ツノ [tsuno] (角)

コノツィ [konotsʃi] (九つ)

ノーギリ [no:ɡiri] (鋸)

ノーリユン [no:rjuN] (残る)

- ④ 龍郷町のネ[ne]は長音や母音が融合している場合や新しい語に現れます。

ネ：ネー [ne:] (姉) タネ [tane] (種)

ネセ [nese] (青年)

ドコネ [dokone] (大根)

- ⑤ この他にニャ[nja], ニュ[nju], ニョ[njo], ニ'ユ[ʔnju]があります。ニ'ユ[ʔnju]は無気喉頭化音で、語頭音の脱落によりできた音です。

ニャ：コエーニャ [kē:nja] (肩)

ニャン [njaN] (見ない)

ニュ：シニユン [ʃinjuN] (死ぬ)

ニユン [njuN] (見る)

ニョ：ニシンニョ [niʃinnjo] (見てみよう)

ニ'ユ：ニ'ユチ [ʔnjutʃi] (命)

- (8) ハ行 ハ行音には以下のようなものがあります。

〈共通語〉		〈龍郷町〉
ハ[ha]	——	ハ[ha]
ヒ[çi]	——	ヒ[çi]
フ[Fu]	——	フ[Fu]
ヘ[he]	——	フウイ[Fʃi]
ホ[ho]	——	

- ① 共通語のハは龍郷町でもハ[ha], ヒはヒ[çi], フはフ[Fu]と発音されます。

ハ：ハ [ha] (歯) ハナ [hana] (鼻)

ハナ [hana] (花) ハネ [hane] (羽根)

ヒ：ヒギ [çigi] (髭)

ヒジャリ [çizari] (左)

ヒンマ [çimma] (昼)

フ：フヌイ [funʃi] (船)

- ② 共通語のへは龍郷町ではフウイ[Fʃi]と発音されます。

フウイ：フウイラ [Fʃira] (へら)

また、次のように、母音の融合が起きた場合にもフウイ[Fʃi]が現れます。

フウイン [FiN] (起きる)

＜ Fīru < Foiru < ohiru < okiru

- ③共通語のホは龍郷町ではフ[Fu]と発音されます。

フ：フヌィ[Funi] (骨)

フス[Fusu] (ホソ (へそ))

- ④この他にホ[ho], フォエ[Fè], ヒャ[ça]があります。ホ[ho]は力行の所で述べたように、ko が ho に変化した場合に現れる音です。それぞれの例を挙げておきましょう。

ホ：トホ [toho] (蛸) モホ [moho] (婿)

フォエ：フォエ [Fè] (はえ (南))

フォエン [FèN] (開ける)

ヒャ：ヒャーリ [ça:ri] (光)

- (9)マ行 マ行音には以下のようなものがあります。

〈共通語〉 〈龍郷町〉

マ[ma] ————— マ[ma]

ミ[mi] ミ[mi]

ム[mu] ム[mu]

メ[me] ムィ[mī]

モ[mo] モ[mo]

- ①共通語のマは龍郷町でもマ[ma], ムはム[mu]と発音されます。

マ：マユ [maju] (眉)

マド [mado] (窓)

グマ [guma] (胡麻)

ム：ムシ [muʃi] (虫) ムギ[mugi] (麦)

ユムドゥリ [jumunduri] (雀)

- ②共通語のミは龍郷町ではミ[mi]と発音されるのが一般的ですが、ムィ[mī]になる場合もあります。

ミ：ミン [miN] (耳) カミ [kami] (紙)

ミチ [mitʃi] (道)

ムィ：ムィズィ[mīzi] (水)

タタムィ[tatamī] (畳)

ヤクキムィ[jakkimī] (兄君)

- ③共通語のメは龍郷町ではムィ[mī]に発音されます。

ムィ：ムィ[mī] (目) クムィ[kumī] (米)

ユムィ[jumī] (嫁)

- ④共通語のモはム[mu]と発音される場合とモ[mo]と発音される場合があります。語頭ではム[mu]になりやすく、語中語尾ではモ[mo]になりやすいという傾向がありますが、きちんと規則化できるわけではありません。以下に例を挙げておきます。

ム：ウームン [wu:muN] (雄)

ムィームン [mī:muN] (雌)

ムリ [muri] (森) ムチ [mutʃi] (餅)

モ：モモタブラ [momotabura] (腿)

モモ [momo] (桃) モホ [moho] (婿)

- ⑤この他にメ[me], モェ[mě], ミャ[mja], ミュ[mju], マ' [ʔma]があります。マ' [ʔma]は喉頭化した音で、語頭音の脱落によりできた音です。

メ：ウ'メ [ʔume] (梅)

モェ：モェ [mě] (前)

ミャ：ユミャシユンバン [jumjaʃumbaN]
(読むけれども)

ミュ：ヤミュン [jamjuN] (病む (痛い))

マ'：マ'ーガ [ʔma:ga] (まご (孫))

マ' [ʔma] (馬)

マ'サ [ʔmasa] (おいしい)

- (10)ラ行 ラ行音には以下のようなものがあります。

〈共通語〉 〈龍郷町〉

ラ[ra] ————— ラ[ra]

リ[ri] ————— リ[ri]

ル[ru] ル[ru]

レ[re] ルィ[rī]

ロ[ro] ロ[ro]

- ①共通語のラは龍郷町でもラ[ra], リはり[ri], ルはル[ru]と発音されます。

ラ：ツラ[tsura] (顔)

ホーラシャ [ho:raʃa]

(ほこらしい (嬉しい))

トゥラン [turaN] (取らない)

リ：トゥリ [turi] (鳥)

クスリ [kusuri] (薬) ムリ [muri] (森)

- ル：マルサ [marusa] (丸い)
 フォエル [Fëru] (開ける)
- ②共通語のレはルイ[rɪ]と発音されます。
 ルイ：トゥルイ[turi] (取れ)
 キルイ[?kiri] (着れ (着ろ))
- ③共通語のロはル[ru]と発音される場合とロ
 [ro]と発音される場合があります。[ru]が一
 般的ですが、長音が関係していたり、新しい
 語ではロ[ro]が現れます。
 ル：クル [?kuru] (黒)
 シル [ʃiru] (白)
 ロ：コーロ [ko:ro] (心)
 ドロー [doro:] (所)
 トウロ [turo] (取ろう)
- ④この他にリャ[rja], リュ[rju], リョ[rjo]が
 あります。
 リャ：アッサリャシユンバン
 [ʔassarjaʃumbaN] (暑いけれども)
 リュ：トゥリユン [turjuN] (取る)
 キルユン [?kirjuN] (着る)
 リョ：アツカリョンバン
 [ʔatsukarjombaN] (暑いだろうが)

以上、北奄美方言を中心に、発音の特徴を
 おおまかに見てきました。共通語とかなりき
 れいな対応関係があることが分かりますが、
 それにしても、母音、子音ともにかなり激し
 い変化を起こしています。なぜ、このように
 音が変化するのでしょうか。これを考えるた
 めには、南奄美方言や他の琉球方言も見る必
 要があります。(この稿続く)

文 献

- 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編(1984)『講
 座方言学 沖縄・奄美の方言』国書
 刊行会
 奥村三雄(1990)『方言国語史研究』東京
 堂出版
 上村孝二(1998)『九州方言・南島方言の研

究』秋山書店

- 近藤健一郎(1999)「近代沖縄における方言
 札(1)ー八重山地域の学校記念誌を
 資料としてー」『愛知県立大学文学
 部論集』47
 中本正智(1976)『琉球方言音韻の研究』法
 政大学出版
 西村浩子(1998)「奄美諸島における昭和期
 の『標準語』教育ー方言禁止から方
 言尊重へー」『松山東雲女子大学人
 文学部紀要』6,
 平山輝男編・木部暢子鹿児島県編(1997)『鹿
 児島県のことば』明治書院
 前田晶子(2004)「離島における地域の人間
 形成と学校ー沖永良部島・国頭小学
 校の1970年代ー」『AMAMI News
 Letter』No.8

付 記

龍郷町方言の調査では、以下の方々にお世
 話になりました。この場を借りて御礼申し上
 げます。

青木カツ(1914) 奥田純夫(1928)
 大司トキエ(1923) 作田和国(1931)
 作田マコ(1935) 作田ヤヨイ(1937)
 松下テツエ(1926) 松下照雄(1927)
 松下ヨリ(1902)

(数字は生年。なお、敬称は略させていただ
 きました。)